

保護者を対象とした子どもの病気に関する学習サイトの提案

澤木 恵

不急な病気で救急を受診する「コンビニ受診」が、近年、問題となっている。たとえば、小児科の救急受診は軽症受診が全体の約 8 割を占めているという報告がある。「コンビニ受診」の背景には、共働き家庭の増加や核家族化が根底にあると考えられる。相談できる家族が身近にいないだけでなく、育児経験の世代間の共有もすすまなくなり、孤立した保護者の不安のみが増大していると考えられる。増大する一方の不安を軽減する手立てとして、保護者が子どもの病気に関する知識を獲得できる環境をととのえることが挙げられる。保護者が子どもの病気に関する知識を獲得し、緊急に受診が必要な症状とそうでない症状との見極めがつけられるようになれば、「コンビニ受診」を選択する保護者も少なくなると考えられる。

近年の保護者は「ケータイ世代」と呼ばれる世代が大半を占めつつある。そこで、本研究では、家庭において体調のすぐれない子どもの医療機関受診の緊急性の判断およびとっさの対処ができるようになるために、子どもの病気の家庭での対処法を保護者が学習するための携帯電話向けサイトを作成した。

主な情報源としては、茨城県と茨城県小児救急医療協議会により作成された「子どもの救急ってどんなとき？」というパンフレットを利用した。このパンフレットにおいて説明されている各症状別の対処法より、6つの症状(発熱、せき・呼吸困難、下痢、嘔吐、腹痛、痙攣)について情報の抽出と再構成を行った。再構成を行う際の枠組みは、「発生の機序または症状の概要」「観察のポイント」「受診の目安」「水分補給」「対処」「食事」「注意」「入浴」の8項目とした。この枠組みを使用して抽出した情報を整理して、提供するための情報を作成した。

携帯サイトは、webサーバ、サーバサイドスクリプト、HTMLを組み合わせて構築した。構築した携帯サイトでは、2段階の構成により利用者を各症状の対処法へと導くようにした。また、操作しやすくするために、画面内のメニューを選択する代わりに、携帯電話の数字キーを押すことにより、リンク先へとすぐに移動できるようにした。

本研究による携帯サイトを利用して学習することで、家庭において体調のすぐれない子どもの医療機関受診の緊急性の判断およびとっさの対処ができるようになるために必要な知識を、保護者は獲得することができる。その結果、ただちに「コンビニ受診」を選択するのではなく、子どもの病状をよく観察し、さらに、少しでも楽になるような対処を家庭において行うことができるようになることを期待できる。

(指導教員 岩澤まり子)